

先日、知り合いの校長先生から電話をいただいた。その方は、校長職の合間に、昔、自分が行っていた授業を、今、行うとしたら、どのようにやるだろうと考えているそうである。

この方は、自分の授業の板書計画をすべて取ってあるような先生である。毎時間の板書計画が存在しているということは、それだけ計画的かつ入念な準備をした上で毎時間の授業に臨んでいたという証である。なかなか真似できるものではない。

昔の授業を、今求められている授業にする。言い換えれば、アクティブ・ラーニング型の授業、主体的・対話的で深い学びの実現に向かう授業となろうか。

以前、この方と同じ職場で働いていた。席は隣同士である。いろいろな話をうかがった。その中に、前述の板書計画のこともあった。この方が、先生方を生徒役として模擬授業をしてくださったことがある。今でも私の記憶に残っている。「これが高校の授業だ」と思ったものである。

たぶん、この方は、あの当時の模擬授業を自分の昔の授業として位置付けているのだと思う。だとしたら、アクティブ・ラーニングと言っても、それほど改善する必要性は感じない。アクティブ・ラーニングというと、対話的な学びという視点もあり、一般的にはグループ活動など生徒が活動的になる学習をイメージしがちである。

だが、生徒が動いたからと言ってアクティブ・ラーニングあるいは対話的な学びとなる保証はない。見た目は、形態としては、アクティブあるいは対話的に見えるかもしれない。肝心なことは、それが学びとなっているか、生徒が本気で考えているかという点である。「活動あって学習なし」「活動あって学びなし」という言葉もある。

ポイントは、生徒の脳みそがアクティブになっているかどうかである。したがって、一斉形態であっても、生徒が本気で考え、それを表現し、その時間の学習を振り返ることができれば、立派なアクティブ・ラーニングと言える。

ついこの前まで、感染リスクの高い学習活動ができずにいた。長時間にわたるグループ活動もその一つである。先生方の中には、アクティブ・ラーニングが難しくなったと感じた方もいたかもしれない。対話的な学びというのは、人との対話だけではない。教材との対話など、多くの意味を含んでいる。

「ピンチはチャンス」という言葉をよく聞く。実は、アクティブ・ラーニングに関しても、この言葉は通用する。生徒を動かすことができない。ではどうするか。生徒に提示する学習課題を吟味する。授業で使う教材を工夫する。生徒への発問を精選し、絞り込む。このようなことを行うことで、一斉形態であっても生徒の脳みそがアクティブになる授業を展開することができるようになる。脳みそがアクティブになるということは、生徒が本気で一生懸命考えるということである。“脳みそに汗をかく”のが理想である。

制限の多いコロナ禍での授業が、かえってアクティブ・ラーニングを考える契機となったわけである。このことは、電話で話した方とも大いに意見が一致した。そもそも私の記憶では、この方の模擬授業は、生徒役であった私を含めた先生方の脳みそを十分にアクティブにするものであった。

この方は、昔の授業と今の授業を比較する形で資料を作成するそうである。そこには、自ずと授業改善のポイントが浮かび上がってくるはずである。これは貴重な資料となるはずである。今から資料ができ上がる日が待ち遠しい。そして、一人でも多くの先生方が、この資料に触発されて、自分の授業を改善いや改革してくれることを望む。